

Newsletter

2025.3.10

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

「手話カフェ」を通して広がるつながり

全学共通カリキュラム運営センター兼任講師（日本手話）

佐沢 静枝

手話カフェ開催の経緯や参加メンバー

2012年度より、日本手話の授業を担当しております。学生には、異文化や異言語を学ぶことを通じて、社会に出た際にさまざまな立場の人々を尊重し、共生社会を築く力を育んでほしいという思いで、今日まで授業を続けてきました。手話を習得した学生が、大学内のろう・難聴学生や、アルバイト先で出会うろう・難聴者と、自然に手話で会話しサポートできることが理想です。今年度から実施している「手話カフェ」で、授業内では補いきれない部分をカバーできていると考えています。

手話カフェをはじめたきっかけは、あるろう学生から「学内で誰が手話をできるのかわからず、孤立して寂しさを感じることもある」と相談を受けたことです。手話を習得した学生がろう学生の近くにいても、お互いの顔を見知らず、会話の機会がないまま卒業してしまうのは非常にもったいないと感じ、授業外でも交流の機会を設けたいと考えようになりました。ちょうどそんな時、しょうがい学生支援室からろう者との交流の機会が欲しいという声が寄せられているため、お昼休みに何かできないかと相談を受けたのです。こうして、しょうがい学生支援室と私自身の思いが合致し、「手話カフェ」が実現しました。この取り組みは、しょうがい学生支援室での張り紙や授業内での周知を通じて広がっています。

参加者は、履修生だけでなく、セカンドステージ大学生、履修対象年次外の1年次生、手話に興味のある学生、手話サークルに所属する学生などさまざまです。池袋キャンパス、新座キャンパスともに参加者は12名前後で、そのうち1～2名はろう学生が含まれます。新座キャンパスでは、手話カフェに参加しているろう学生が新たに手話サークルを立ち上げるなど、頼もしい動きも見られます。

手話カフェはランチタイムに行われるため、自由に手話で会話できる場として、基本的には教員が通訳をせず、学生自身が相手に伝えようと努力しています。この経験は、手話力の向上やろう学生との積極的な交流につながっています。中には、手話がわからない参加者に積極的に通訳をする学生もいます。

テーマは趣味、連休の思い出、オススメの物などさまざまですが、人と人との関わりが薄れがちな昨今、この交流の場を通じて、人とのつながりを大切にしていきたいと考えています。



手話カフェの様子（左：池袋キャンパス、右：新座キャンパス）

手話カフェに参加している学生のコメント

池袋キャンパス 小原 はるさん（法学部法学科2年次）

私が普段学ぶ池袋キャンパスには手話を使うろう学生が私一人しかおらず心細かったのですが、手話カフェを通して同じキャンパス内にいる手話へ興味を抱いている学生と出会うことができました。普段は筆談や文字変換アプリを用いて話しているので、気兼ねなく手話で話せる手話カフェの時間がとても心地いいです。手話を通じて仲を深めた学生とは、ろうイベントやろう者が経営する飲食店を訪れ、楽しいひと時を過ごせました。卒業するまで手話カフェへ通います！



新座キャンパス 高橋 豪さん（現代心理学部映像身体学科2年次）

ろう学生としては、手話カフェのおかげで、手話で話す時間を確保することができてうれしい限りです。一方、手話を学ぶ学生には、授業で学んだ内容を昼休みの手話カフェで、手話でコミュニケーションをとりながら過去に学んだ内容を復習することもできるというメリットがあります。ろう学生としても、手話を学ぶ学生としてもお互いウィン・ウィンの関係を築けています。



TOPICS 2025年度から「日本手話初級」の履修機会が広がります

日本手話は、2010年度の開講以来、言語Bの中でも屈指の人気授業です。近年はろう者にスポットライトを当てた映画やドラマが話題になったこともあり、履修希望者は毎年増加、特に入門科目にあたる「日本手話初級」の抽選倍率は非常に高い状況が続いています。2025年には東京デフリンピックが開催されるため、手話への興味関心はさらに高まることが予想されます。

そこで、立教大学では2025年度から「日本手話」初級レベルの開講コマ数を増やすことにしました。各キャンパスで「日本手話初級1」（春学期）、「日本手話初級2」（秋学期）を1コマから2コマに増設し、言語としての日本手話を会得するばかりでなく、ろう者の文化に触れ、多様性を尊重し他者への寛容性を身につける機会を1人でも多くの学生に提供していきます。

東京2025デフリンピック

「デフリンピック」をご存知でしょうか。デフリンピックは、4年に一度開催される、ろう者・難聴者アスリートのための国際スポーツ大会です。2025年11月には、100周年の記念すべき大会となる「東京2025デフリンピック」が開催されます。日本では初めての開催で、実施競技は21種目、世界192カ国から6000人が来日する予定です。

選手たちは、「耳が聞こえない立場で公平にプレーする」ため、補聴器などは外した状態で参加します。競技ルールはオリンピックと同じですが、視覚的情報を活用した進行為が特徴です。陸上や水泳などのスタートは、ピストルの「音」ではなく、スタートランプによる「光の合図」で視覚的に知らせています。

オリンピックとは異なる国際手話や世界各国の手話によるコミュニケーションで賑わう大会、ぜひ会場に訪れて、応援してください！

森本 正和

留学体験記

ドイツ語 伊海 颯さん（文学部文学科ドイツ文学専修4年次）

今回は私が留学中に得られたこと、そしてその経験を留学後どのように活かすことができたか、の2点についてお話ししたいと思います。私は2023年9月～2024年8月まで大学の派遣留学プログラムを利用して1年間留学をしました。ヴッパータールというドイツ北西部の都市で、大きくもなく小さくもなくとても過ごしやすい街だったと思います。留学をして得られたことは大きく2つあります。1つ目はドイツ語の上達です。日本で勉強していた時と比べ、ドイツ語を話す力がより早く身についたように思います。2つ目は自分の意見をハッキリ伝えることです。これは友達の母親に教えていただきました。日本に帰ってからも、自分の意見をハッキリ伝えることで、相手に正確に伝えることができるようになったと思います。留学後にはこの経験を通して、もう一度ドイツに留学することを決めました。留学前は留学そのものがゴールだと思っていたのですが、留学中に自分自身の将来をより深く考えることができ、将来の目標に近づくにはもう一度ドイツに留学することが必要だと気づくことができました。立教大学では留学先としてドイツを選ぶ人は少ないと思いますが、とても魅力的な国であることは間違いのないため、ぜひドイツも選択肢に入れていただけるととても幸いです。



フランス語 石橋 瑞葵さん（文学部文学科フランス文学専修3年次）

2023年9月から2024年6月まで大学の派遣留学プログラムを利用してフランス、リヨン第三大学へ留学していました。1年次の時から全学共通科目（全カリ）のフランス語科目を積極的に履修し、留学に必要なフランス語力を培い、留学に向けての準備を整えました。留学から得られるものは多岐にわたりますが、その中でも特に自分の成長を感じた点は2つあります。1つは、困難に直面した時、焦らず対処する姿勢と折れない精神力です。留学中は自宅のトイレの故障を含め、さまざまなトラブルに直面しましたが、これは「フランスの洗礼」だと思い、粘り強く解決へと向かいました。もう1つは複言語力です。私は現地の大学で、第3外国語として中国語の授業を履修し、フランス語で中国語を学ぶという貴重な経験をしました。そして、各国から集まった留学生たちとそれぞれの言語で交流した経験から、到達度にかかわらず、複数の言語を学ぶことは、言語も文化も異なる他者を尊重できる姿勢を養うことにつながると実感しました。立教大学での学びと留学先の大学での学びの架け橋である全カリ言語科目は、私にとって不可欠です。最後になりますが、「世界を知ろう！」にて発表の場を設けてくださった先生方に心より感謝申し上げます。



スペイン語 岡田 姫奈さん（異文化コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科3年次）

私は2023年8月から2024年1月まで学部間の交換留学制度を利用してスペイン・サンセバスチャンにあるバスク大学に留学をしました。留学で得た最大の学びは「自分の意見や理解をはっきりと伝えることの重要性」です。これは、現地アパートの大家さんとのやり取りで気づきました。ある日、水回りの使い方について説明を受けた際、私が相槌で理解を示していたにもかかわらず、「本当に理解しているの？」と尋ねられたのです。それ以降、現地の授業や友人との会話でも口頭での表現を意識し、より円滑なコミュニケーションを図るよう努めました。こうした実践を可能にするためには事前のスペイン語力が大切です。留学前に履修した中級レベルのスペイン語の授業は特に役立ちました。この授業では、自分の旅行計画についてスペイン語で発表するほか、日常会話やリアクション練習を行い、留学先でのコミュニケーション力向上につながりました。また、留学後に履修した「スペイン語演習5」では、スペイン語圏の食文化について学び、留学中の体験を文化学修に結びつける機会を得ました。これらの全カリスペイン語科目は、留学体験をより実り多いものにしてくれました。これから留学を考えている方、また帰国された方には、ぜひ全カリ言語系科目を活用していただきたいです。最後に、この登壇プログラムの実施にご協力いただいたすべての皆さまに感謝申し上げます。



中国語 中根 瑠南さん（観光学部観光学科4年次）

私は、1、2年次に中級・上級レベルの中国語科目を履修しました。そして、学業の世界にとどまらず中国語を使って社会を学びたいという思いから、台湾にある5つ星ホテル「リージェント台北」にて半年間のインターンシップに参加しました。インターンシップでは、主に企業の重役の方々が利用する「タイパン」というラウンジにてパトラーとしてお客さまのご希望に迅速に応えサポートをしていました。インターン中は、中国語、英語、日本語を使用していたため幾度となくミスコミュニケーションを経験し、主体的に発言や行動をすることにおびえる時期もありました。しかし、同僚から「ミスをした事実よりも原因を考え次はどうするのか、ミスをどのように次へ活かすのか」が重要であるということを学びました。以降、ミスをしたときは、原因と次の行動を考えることに焦点をあて日々積極的にお客さまや同僚との交流を大切にしました。最終的には、お客さまや同僚の笑顔へとつながり、まさに失敗で終わらせるのか糧にするのかは自分次第だと学びました。言語は相手がいて初めて楽しさを味わうことができます。最初は、言い間違えたら、伝わらなかったらとたくさんの不安を感じます。しかし、間違えた分だけ多く学ぶことができ自分の身となり成長へつながります。相手とのコミュニケーションを始める鍵は、「挨拶」です。ぜひ、相手の母国語で挨拶を試みてください。きっと言葉の力に改めて感動すると思います。



朝鮮語 小林 礼佳さん（文学研究科史学専攻博士前期課程1年次）

私の留学先はソウルにある西江大学大学院で、専攻は史学専攻（朝鮮史）でした。この留学を通して私は「朝鮮語学修がなぜ今必要なのか？」という従前から抱いていた問いへの解答を見つけられたと感じています。

現地でのコミュニケーションはすべて朝鮮語であり、日常会話に加え、専門的な朝鮮語を並行してインプットおよびアウトプットする機会に大変恵まれました。そして、歴史を学ぶ意義を再認識しました。西江大学では、歴史を過去と現在の会話だと捉えており、歴史は「生きた人文学」です。その学びのために、私にとって朝鮮語学修が今必要なのでした。

韓国留学を検討するきっかけとなったのは、充実した学修環境を提供してくれる全カリ言語系科目です。そこで朝鮮語の学修を進めるうちに、専門的な朝鮮史研究への意欲が高まり、大学院での留学を実現することができました。全カリでの言語学修が、皆さん各々が持つ疑問や課題にどのように取り組み、解決するかを考える機会となることを願っております。



ロシア語 近藤 佑紀さん（コミュニティ福祉学部福祉学科3年次）

私は全カリでロシア語の授業を履修し、もっとロシア語を学びたいと思ったので、2024年9月に2週間、ウズベキスタンにあるモスクワ大学タシケント校に私費留学しました。この語学研修で特に頑張ったことは、ロシア語のリスニング能力向上と、現地で使われている単語の習得です。まず、私は日本で毎日数時間ロシア語を勉強していたため自分のロシア語能力に自信を持っていたのですが、留学初日に自然な速さのロシア語が聞き取れず、自信を失ったことが転機となりました。そこから、休憩中や街中でロシア語を常に耳に入れることを意識しました。その結果、自然な速さのロシア語が聞き取れるよう



になりました。また、教科書に載っていない表現が頻繁に使われていたため、聞き取った単語を電子辞書で調べ、ノートに書き出して覚えるという作業を行いました。これにより、実践的な単語力も大幅に向上しました。さらに、この語学研修では、ウズベキスタンの魅力も深く体験することができました。現地のおいしい料理を食べ、美しい観光地を訪れ、また、人々の温かさに触れることができました。今回の研修は2週間という短期のものでしたが、毎日がとても充実していて、1カ月にも感じられるほどでした。この経験によって、ロシア語能力が大きく成長し、一層ロシア語に対する勉強意欲が高まりました。

2025年3月で任期終了となる執行部からの挨拶

全学共通カリキュラム運営センター部長／法学部教授
浅妻 章如

2023年4月からの2年間の任期において、幾つか苦勞したこと（書ける範囲で）のうちの一つに、障碍学生支援があります。特に、2024年4月から、障碍学生に対する遠隔授業の提供の可能性を探ることが義務化された（念のために述べると、遠隔授業の義務化ではありません）ことが大きいです。立教大学は対面授業を原則として打ち出しており、遠隔授業のみで卒業できる可能性を提供しているとは標榜しておりません。このことと、先述の義務化は相性が悪く、どうしても、遠隔授業の提供の可能性を探ることに時間がかかる事例がでてきます。必修の言語教育が遠隔授業と相性が悪いという事情もあります。遠隔授業に限らず、合理的配慮に関し、成績評価の面においても悩ましい問題も提起されました。詳述できませんが、或る障碍学生への合理的配慮として特別措置を講じるべきなのか、それを講じることは他の学生の成績評価との関係において許容されることなのか、慎重な判断を必要とします。私はたまたま法学部の出身なので、先例として最判平成8年3月8日民集50巻3号469頁を習いました。信仰上の理由により剣道実技を拒否した市立高等専門学校の学生に、剣道実技以外の代替措置を提供する義務が学校側にあるかが問われた事例です（結論は積極）。判例を念頭に置きつつ、しかし、全カリで提供されている科目の特性については私では分かりませんので、分かる先生と慎重に協議することとなります。

もう一つ、苦勞したというのとは異なりますが、難しいと感じていることとして、FLER（外国語教育研究センター）と全カリ部長との関係が挙げられます。全カリ部長は全カリ科目として総合系科目のみならず言語系科目も管轄しています。しかしながら私を含め殆どの全カリ部長は言語教育について素人です。それでも、言語教員が△△をしたいと主張してきたことに対して、仮の諾否（正式には全カリ委員会で全学部長に判断してもらうこととなるので、全カリ部長の諾否は仮のものにとどまる）をしなければならない、ということも出てきます。言語教員からすれば、何も分かっていない奴（全カリ部長）に頭を押さえつけられている感じですから、気分が悪いでしょう。では、言語教員の提案をいきなり全カリ委員会で全学部長に判断してもらう体制に変革すべきでしょうか。そのような体制が円滑にまわるとはとても想像し難く、言語教員と全学部長との間の中継役があった方が、混乱は減るでしょう。その中継役が全カリ部長でなければならないとまでは言えないと思いますので、現状とは違う組織体制も構想しうるかもしれない、とは思いますが、正直申して、今より良い組織体制になるかどうか、見通しが立ちません。ですので、私は代替案を持ち合わせておらず、難しいと感じています。

書ける範囲で2つのことを書きました。書けないことも含めて、次の全カリ部長に上手く引継ぎをしてまいりたいと思います。

言語系科目構想・運営チームリーダー／外国語教育研究センター准教授
松本 句子

2020年4月FLER（外国語教育研究センター）設立時に本学に着任、右も左もわからないまま同期と共にそれぞれ各言語教育研究室主任になりました。様々な事情から全カリ言語チームリーダーも引き受けることになり、その年の秋学期から見習いが開始、2021年から2期4年も務めてしまったため、全カリ執行部にどっぷり浸かった4年半となりました。

各言語教育研究室には、異文化コミュニケーション学部の先生方から引き継いだ（あるいはそれ以前からあった）それぞれの文化と自治、そして事情があります。言語チームリーダーはそれらを取りまとめ、言語系科目についての決定をするのが仕事ですが、一言語の研究室主任でもある私が務めるには重責でした。FLERと全カリ言語の役割や組織としての棲み分けは、理論上はあった（ある）と理解していますが、重なる部分がほとんどで調整が難しいことも多く、幾度となくバランス感覚を失いました。

とはいえ、前任校までには経験したことのない、言語を超え、学部を超え、全学生の言語教育を真剣に考えること、また他部署の方々との交流の機会を多く与えられたことには感謝していますし、私自身の複言語・複文化の意識を大きく前進させたことは言うまでもありません。

総合系科目構想・運営チームリーダー／文学部教授 後藤 雅知

前任の総合チームリーダーが任期半ばで降りたあとを引き継いだだけであったので、てっきり残り1年を全うすれば解放されるものと思っていたのだが、ズルズルと2期4年も続けることになってしまった。

前任から引き継いだ喫緊の課題として、①外国語による総合系科目（F科目）の設置およびその大幅増コマ、②「立教ゼミナール発展編」の廃止があったが、②については最初の全カリ委員会で反対されて以降、何もできなかった。これについてはRIKKYO Learning Style 第2ステージ構想における履修環境分科会での最終報告で、一定度の改革案を示すことができたのがやっとの成果というところであらうか。4年間もチームリーダーをつとめながら、達成した事項のなんと少ないことかとも思うが、年間で750コマ程度を開講する総合系科目の運営は、毎年のルーティン作業を無事にこなすだけでも手一杯であった。イレギュラーな案件が発生しその対処に困ることたびたびであったが、事務の方には本当にいろいろ支えていただいた。RIKKYO Learning Style 第2ステージに向けて、総合系科目の整理や新規開設作業を進めねばならない次のチームリーダーに引き継ぎして、この4年を終えることにしたい。

2024年度 全学共通カリキュラム運営センターの主な活動

<言語系科目構想・運営チーム>

- ①英語教育研究室
 - ・4月5日（金）春学期FDセミナー
 - ・9月12日（木）秋学期FDセミナー
- ②ドイツ語教育研究室
 - ・7月23日（火）春学期担当者連絡会
 - ・9月11日（水）第5回新カリFD
 - ・2月19日（水）秋学期担当者連絡会
- ③フランス語教育研究室
 - ・7月5日（金）春学期担当者連絡会
 - ・12月21日（土）秋学期担当者連絡会
- ④スペイン語教育研究室
 - ・4月2日（火）新カリFD
 - ・7月24日（水）春学期担当者連絡会
 - ・1月22日（水）秋学期担当者連絡会
- ⑤中国語教育研究室
 - ・4月2日（火）・7月29日（月）春学期担当者連絡会
 - ・9月13日（金）・1月28日（火）秋学期担当者連絡会
- ⑥朝鮮語教育研究室
 - ・7月8日（月）春学期担当者連絡会
 - ・1月23日（木）秋学期担当者連絡会
- ⑦ロシア語教育研究室
 - ・8月9日（金）春学期担当者連絡会
 - ・2月19日（水）秋学期担当者連絡会

<総合系科目構想・運営チーム>

- ・4月3日（水）スポーツ実習科目担当者連絡会
- ・9月13日（金）2024年度第2回総合系科目担当者連絡会
- ・2月28日（金）2025年度第1回総合系科目担当者連絡会

<授業評価アンケート関連>

- ・2024年度「学生による授業評価アンケート」
言語系科目実施科目数：春学期919科目、秋学期1,357科目、計2,276科目
総合系科目実施科目数：春学期238科目、秋学期209科目、計447科目
- ・スポーツ実習「授業評価アンケート」
実施科目数：春学期83科目、秋学期73科目、計156科目

全カリニュースレター No.59

発行 2025.3.10

発行人 浅妻 章如

編集人 森本 正和、松本 句子

発行所 立教大学 全学共通カリキュラム運営センター